

種苗をめぐる情勢

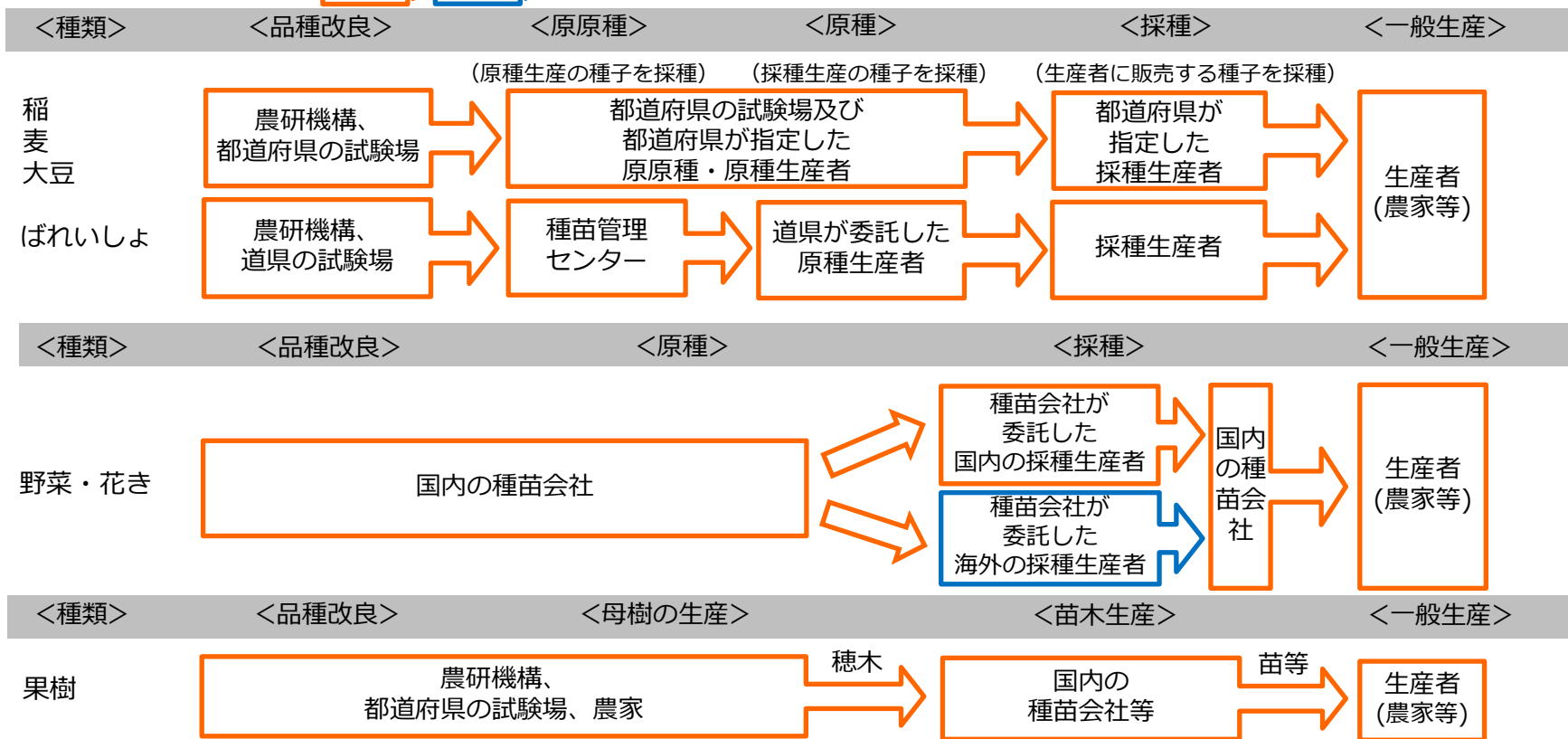
令和7年8月

農林水産省知的財産課

我が国における種苗の供給体制

- ・ 稲、麦、大豆、ばれいしょ等の主要農作物の種子は、農研機構や都道府県の試験場が開発した優良な品種の原原種を元にして国内の種苗生産地で段階的に増殖され、供給されている。
- ・ 野菜・花きの種子は、国内の種苗会社が開発した優良な品種を用いて国内及び海外の生産地で増殖され、供給されている。
- ・ 果樹の苗は、農研機構や都道府県の試験場等が開発した優良な品種の母樹の穂木（枝）を国内で他の品種（台木）に接いで増殖し苗木に仕立てられ、供給されている。

【種子供給の代表的な例】 国内 → 海外



我が国における種苗の需給動向

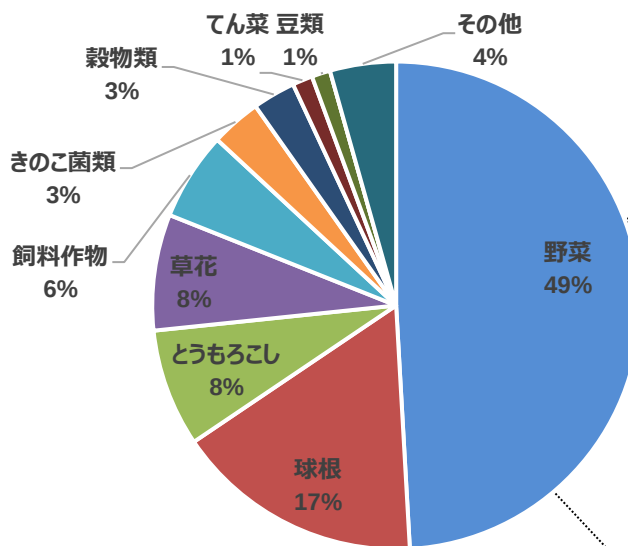
- 我が国の種苗産業の市場規模は、2,600億円程度と推計される。
- 穀類、果樹の種苗は、ほぼ全量国内で生産されている。
- 野菜種子については、国内流通の約9割が国外で生産されているが、これは日本の種苗会社が、種子生産に適した北・南半球の複数国でリスク分散して生産を行っていることによるもの。加えて、約1年分を国内で備蓄するなどにより、安定供給が確保されている。

我が国の種苗販売市場規模

品目	販売額（億円）
穀 物	311.8
果 樹	266.5
野 菜	1,689.8
花 き	300.3
合計	2,568.4

（資料：JATAFF「令和2年度種苗産業動向調査」）

我が国における種苗の輸入額（2024年）



野菜種子の輸入元国

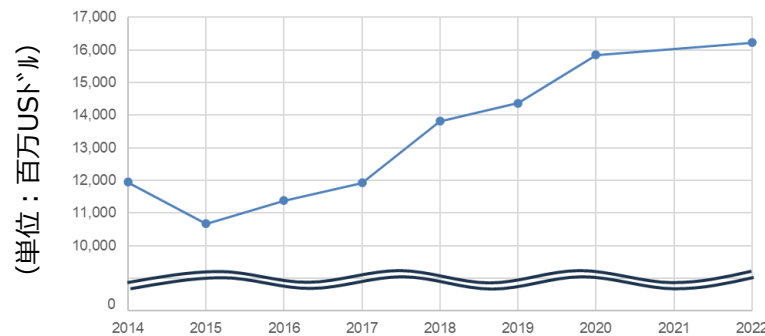
国名	輸入額 （百万円）	数量 （トン）
チリ	6,325	413
アメリカ合衆国	3,226	850
南アフリカ共和国	2,786	227
中華人民共和国	2,235	373
イタリア	1,746	405
タイ	895	54
ニュージーランド	795	294
デンマーク	631	389
ペルー	630	5
インド	548	59
その他	2,872	254
合計	22,689	3,322

（出典：財務省「貿易統計」）

世界の種苗貿易と産業規模

- 世界の種苗の貿易額は、増加傾向で推移。2022年（令和4年）の輸出額は約162億USドル（約2兆666億円）となっている。
- 世界の種苗の市場規模は、おおむね420億ドル程度と見積られている。

（1）世界の種苗の輸出額の推移



※2018年から種イモ・木の種が追加。

2018年輸出：（種イモ）935百万USドル、（木の種）19百万USドル

（出典：国際種子連盟（ISF））

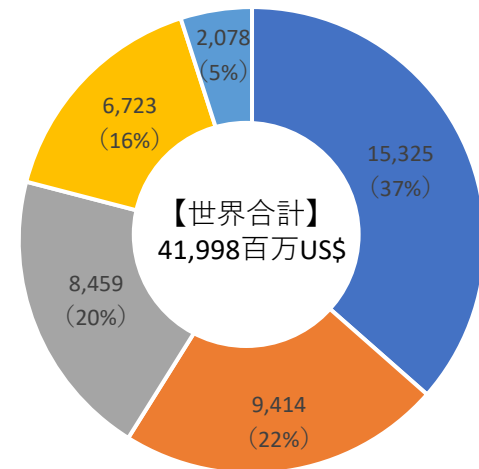
（3）国別種苗の貿易額(2022年)

（単位：百万USドル）

国名	輸出額		国名	輸入額	
		うち野菜			うち野菜
1オランダ	3,162	2,202	1オランダ	1,264	555
2フランス	2,565	555	2アメリカ合衆国	1,161	362
3アメリカ合衆国	1,965	547	3ドイツ	984	112
4ドイツ	1,123	78	4フランス	946	235
5デンマーク	540	50	5イタリア	847	238
6イタリア	509	153	6スペイン	721	321
7ハンガリー	482	9	7ベルギー	626	32
8ポーランド	450	18	8中国	530	273
9ルーマニア	446	3	9メキシコ	454	330
10オーストリア	410	10	10ルーマニア	397	29
.....					
26日本	136	60	16日本	271	132
その他	4,443	1,278	その他	6,285	1,813
総計	16,230	4,963	総計	14,484	4,432

（出典：国際種子連盟（ISF））

（2）世界の種苗市場規模（2021年）



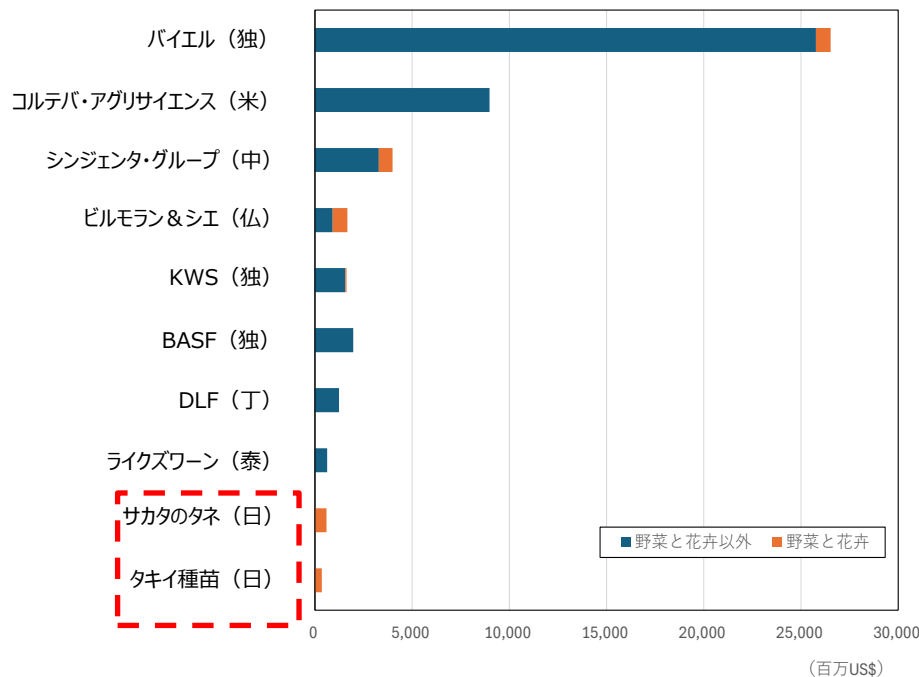
■ 北米 ■ アジア・太平洋 ■ 南米 ■ EU ■ 中東/アフリカ

（資料：JATAFF「令和5年度種苗産業動向調査」）

世界の主要な種苗会社の概要

- 世界の主要な種苗会社の種苗売上高をみると、バイエル（独）、コルテバアグリサイエンス（米）、シンジェンタ（中）等が上位を占めており、我が国からは、サカタのタネ及びタキイ種苗が世界上位10社に入っている。
- 両社は、多くの国に展開しているグローバル企業で野菜種子においては上位を占めており、特に、サカタのタネはブロッコリーで高い世界シェア、タキイ種苗は東南アジアのキャベツで高いシェアを有している。
- 国内市場の拡大が見込めない一方、種苗の国際競争の激化が見込まれており、我が国種苗会社のさらなる輸出拡大や海外展開が重要。

世界の主要な種苗会社の種苗売上高（2022年）



（資料：JATAFF「令和5年度種苗産業動向調査」）

野菜種子及び花き種子の主要会社のシェア(2020年)

	販売額 (百万US\$)	シェア (%)
ビルモラン	780	10.3
バイエル	729	9.6
シンジェンタ	653	8.6
ライクズワーン	527	7.0
BASE	511	6.7
タキイ種苗	458	6.0
サカタのタネ	379	5.0
Enza	373	4.9
Bajo	250	3.3
East-West	168	2.2
KWS	61	0.8
その他	2684	35.4
総計	7573	100

我が国の種苗会社の海外展開事例

サカタのタネ

- ブロッコリーの約65%、トルコギキョウの約70%の世界シェア

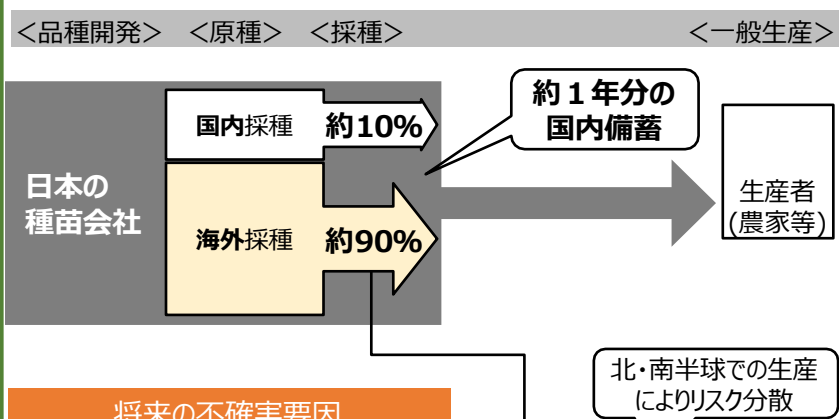
タキイ種苗

- キャベツのインドネシアでのシェア約70%、タイでのシェア約50～60%
- 観賞用ヒマワリ及びハボタンの世界シェア約70～80%

(参考) 野菜種子の安定供給に向けて

- 野菜種子は、良質な種子を合理的な価格で安定的に供給するため、日本の種苗会社が適地適作と北・南半球にリスク分散して採種・供給する構造が確立。海外産と国産は9：1で推移しているが、海外産は日本の種苗会社が生産・供給しているもの。
- このような安定供給体制をより盤石なものとするため、近年の気候変動による採種適地の変化等に備えた採種地の開拓を推進するとともに、国内の採種農家の高齢化を踏まえた効率的な採種生産を進める。

我が国の野菜種子の供給体制



将来の不確定要因

<国内>

- ・採種農業者の高齢化

<海外>

- ・気候変動(温暖化等)による採種適地変化
- ・食料生産との競合
- ・好条件採種地を巡る競争激化
- ・採種国の人件費の上昇
- ・生産コスト・物流費の上昇

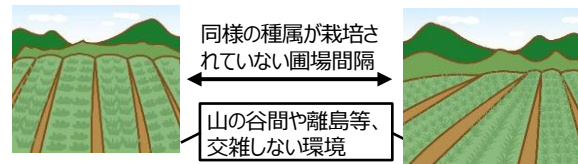
国・地域	R6輸入量(t)
アメリカ合衆国	850
チリ	413
イタリア	405
デンマーク	389
中華人民共和国	373
ニュージーランド	294
南アフリカ共和国	227
オーストラリア	97
インド	59
タイ	54
アルゼンチン	33
大韓民国	30
その他	99
計	3,322

※果樹及び主要作物（稲、麦類、大豆）の種苗は、ほぼ100%国内生産・供給されている。

食料安保の観点から供給構造をより強靱化

国内外における新たな採種適地の開拓

- 気候変動等の影響により、採種適地が移動。新たな採種適地（乾燥した気候や他品種と交雑防止が確保できる山間地や離島）の開拓を進めていく必要。



国内の効率的な採種の推進

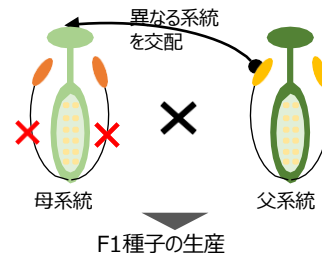
- 野菜の採種には通常青果物生産と異なり手間と時間を要する。国内の採種農家の高齢化が進む中、効率的な採種に向けた技術の導入を進めていく必要。

・効率的な交配技術

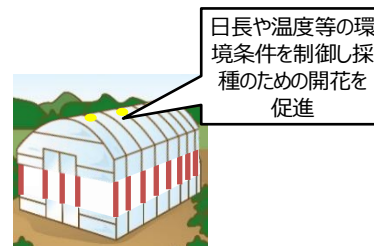
異なる系統を交配して得るF1種子を効率的に生産するため、母系統の花粉を不活化する技術を利用

〔これまで〕
おしべを全て手作業で除去

〔効率的技術〕
・温度管理により、交配を抑制
・薬品処理により、花粉を不活化



・環境を自動制御した効率的な採種



国内を含む世界各地における種子生産基盤を維持・強化し、適地適作とリスク分散を確保した生産・供給構造を強靱化